

研 究 分 野	4 水産資源の持続的利用のための技術開発	部 名	漁業資源部
研 究 課 題 名	(2) 定置網及び漁船漁業における主要漁獲対象資源の持続的利用に関する研究		
予 算 区 分	受託 (国庫：水産資源調査・評価推進委託事業費、国庫：海洋資源管理事業費)、県単 (漁ろう試験費)		
試験研究実施年度・研究期間	令和元年度～令和5年度		
担 当	(主) 森 友彦 (副) 小野寺 光文 (地域性資源) (主) 小野寺 光文 (副) 森 友彦 (回遊性資源) (主) 佐藤 俊昭 (副) 森 友彦 (国際資源)		
協 力 ・ 分 担 関 係	国立研究開発法人水産研究・教育機構 (水産資源研究所他)、国立研究開発法人海洋研究開発機構、北里大学海洋生命科学部、東京大学大気海洋研究所		

<目的>

岩手県海域に生息及び来遊する主要な漁獲対象資源の資源水準を評価し、その変動要因を推定することにより、実践可能で効果の高い資源管理方を提案することを目的とする。なお、本研究の一部は、国が進める我が国周辺の水産資源の評価及び管理を行う水産資源調査・評価推進委託事業により実施した。

<試験研究方法>

1 市場調査及び調査船調査等による資源動向のモニタリング

(1) 水揚動向の把握

岩手県水産情報配信システム「いわて大漁ナビ」により、本県における主要漁獲対象資源の水揚量を集計し、水揚動向を把握した。水揚量は、ケガニを除く全魚種で全漁港の暦年単位で集計した (ケガニは漁期単位 (12月～翌3月20日時点の漁期で集計))。

- ・調査対象：(地域性資源) スケトウダラ、マダラ、ヒラメ、アイナメ、※マコガレイ、ババガレイ、ミズダコ、ケガニ、チゴダラ (旧エゾイソアイナメ)
 - (回遊性資源) さば類、マイワシ、カタクチイワシ、マアジ、ブリ、サワラ、スルメイカ、ヤリイカ
 - (国際資源) クロマグロ、サンマ、サクラマス
- ※水揚量の一部にマガレイを含む。

(2) 市場調査

本県の主要漁獲対象資源の体長組成を把握するために、久慈、宮古、釜石及び大船渡の魚市場において体長測定を行った。また、一部の魚種については、水揚物の一部を購入し、性別、年齢、体重等の詳細なデータ収集のため精密測定を行った。これらのデータを用いて一部の魚種では体長・体重関係や年齢別体長組成を把握し、資源量水準やその動向を推定した。なお、国の資源評価対象となる魚種の測定データについては、水産研究・教育機構等の関係機関に報告し、「我が国周辺漁業資源調査情報システム」のデータベースに登録した。

- ・調査期間：令和5年4月～令和6年3月 (ケガニは令和5年12月～翌4月8日時点)

(3) 調査船調査等

漁業指導調査船「岩手丸 (154トン)」(以下、岩手丸という。)及び「北上丸 (38トン)」(以下、北上丸という。)による調査船調査を実施した。

ア 着底トロール調査 (調査船名：岩手丸、調査期間：令和5年1月～11月)

岩手県沖合に設定した7定線 (39° 00' N～40° 10' Nを10分ごとに区分)、4水深帯 (200、250、300及び350m)において、着底トロール調査を実施した。魚種別採集量と曳網面積に基づいて、39° 30' Nを境に北部と南部に区分して水深帯により層化し、面積-密度法で現存量を推定した。なお、漁

具の採集効率=1とした。

イ カゴ調査（調査船名：北上丸、調査期間：令和5年6月～11月）

釜石沖の4水深帯（90、100、120及び200m）において、カゴ調査を実施した。なお、水深90、100、120m帯は6～9月にタコ類調査として、水深200m帯は10～11月にケガニ漁期前調査として実施した。カゴ揚げ作業は、可能な限り設置日の2日後に行ったが、海況等の影響により回収できない場合は、設置後1～3日の間で回収した。

本調査で採集されたミズダコ、ヤナギダコについては、成長及び移動特性を把握するため、外套膜縁辺部にディスクタグを装着後、採集地点において再放流した。

ウ 底延縄調査（調査船名：北上丸、調査期間：令和5年5月～11月）

釜石湾小松沖（水深100～120m）において、底延縄調査を実施した。底延縄は、投入後、1時間経過後に回収した。なお、令和2～3年度まで餌として使用していたサンマの確保が困難になったことから、令和4年度からは主にさば類を餌として使用した。

エ サンマ漁場調査（調査船名：岩手丸、調査期間：令和5年10月）

探査灯を用いた海面目視と魚群探知機により、トドヶ埼から釜石沖を中心に漁場探索を実施した。また、調査船調査とは別に、釜石魚市場に入港したサンマ漁船から、操業位置や魚群性状等の聞き取りを行った。

オ スルメイカ調査

(ア) 令和5年度太平洋いか類漁場一斉調査（調査船名：岩手丸、調査期間：令和5年6月～8月）

(イ) 漁場形成状況調査（調査船名：岩手丸及び北上丸、調査期間：令和5年6月～10月）

海況条件、民間船の操業状況等を加味して調査点をその都度設定し、自動いか釣機を用いて2時間の釣獲試験を行った。

(4) ヒラメ稚魚追跡調査（新規加入量調査：調査期間：令和5年7月～10月）

野田湾及び大槌湾において、水工研Ⅱ型ソリネットを用いてヒラメ着底稚魚を採集した。採集個体数と曳網面積から求めた平均分布密度（個体/100m²）を過去の調査結果と比較し、着底状況を評価した。

(5) サクラマス産卵床踏査調査（調査期間：令和5年9月～12月）

9～10月に盛川、甲子川、片岸川、熊野川において、産卵床の目視調査を行った。産卵床を発見した際は、位置情報を記録して経過観察を行った。

(6) 資源量水準、資源動向の評価

次に示す資源評価対象魚種について、1－（1）から1－（4）の各結果に基づき、資源量水準、資源動向を評価した。

また、回遊性資源及び国際資源については、令和5年度我が国周辺水域の漁業資源評価（水産庁・国立研究開発法人 水産研究・教育機構）による報告結果を用いた。

ア 地域性資源

(ア) スケトウダラ及びマダラ

岩手丸による着底トロール調査結果に基づく年級別現存量と年齢一体長関係から、年級別現存量を推定し、各年級群の出現状況を評価した。なお、資源量水準、資源動向の評価は令和5年度我が国周辺水域の漁業資源評価（水産庁、国立研究開発法人 水産研究・教育機構）の結果を用いた。

(イ) ヒラメ

水揚量と水揚物の全長組成から年齢別漁獲尾数を推定し、コホート解析（Virtual Population Analysis: VPA（以下「VPA」という。））による資源量推定を行った。資源量推定における基本式は後藤（2006）に従った。なお、年齢起算日は7月1日とし、7月～翌年6月を集計単位年とした。

(ウ) アイナメ

水揚量と水揚物の全長組成から年齢別漁獲尾数を推定し、VPAによる資源量推定を行った。資源量推定における基本式は後藤（2006）に従った。

- (エ) マコガレイ
水揚量と水揚物の全長組成から年齢別漁獲尾数を推定し、VPAによる資源量推定を行った。資源量推定における基本式は後藤（2006）に従った。
- (オ) ミズダコ
北上丸によるカゴ調査結果に基づき、体重階級別CPUE（10カゴあたりの平均採集個体数）を求め、資源量水準とその動向を評価した。
- (カ) ケガニ
宮古及び釜石の魚市場で甲長測定を実施した。また、北上丸によるカゴ調査に基づき、オスガニの甲長階級別CPUE（1カゴあたりの平均採集個体数）を求め、資源量水準とその動向を評価した。また、令和5年度漁期のケガニの漁況予測を行い、漁期前に広報した。
- (キ) チゴダラ（旧エゾイソアイナメ）
北上丸によるカゴ調査及び底延縄調査結果に基づき、CPUE（カゴ：10カゴあたりの平均採集個体数、底延縄：100針あたりの平均採集尾数）、全長組成を求め、資源動向を評価した。
- (ク) タヌキメバル
北上丸による底延縄調査結果に基づき、CPUE（100針あたりの平均採集尾数）、全長組成及び年齢組成を求め、資源動向を評価した。

イ 回遊性資源及び国際資源

本県に来遊する回遊性資源及び国際資源については、関係機関と連携して、「令和5年度我が国周辺水域の漁業資源評価（水産庁、国立研究開発法人 水産研究・教育機構）」としてまとめられている。（資源評価の方法については、各魚種の資源評価報告書を参照）。

- ・評価対象資源：マサバ太平洋系群、ゴマサバ太平洋系群、マイワシ太平洋系群、カタクチイワシ太平洋系群、マアジ太平洋系群、ブリ、スルメイカ冬季発生群、ヤリイカ太平洋系群、サワラ東シナ海系群、ウルメイワシ太平洋系群、サンマ北太平洋系群、クロマグロ太平洋系群、サクラマス日本系群

<結果の概要・要約>

1 市場調査及び調査船調査等による資源動向のモニタリング

(1) 水揚動向の把握

ア 地域性資源

(ア) スケトウダラ及びマダラ

スケトウダラの水揚量は平成26年から平成30年にかけて減少傾向にあったが、令和元年からは増加傾向となり、令和5年の合計水揚量は4,722トン（前年比49%、過去5年平均比[※]97%）となった（図1）。

マダラの水揚量は平成26年以降減少傾向にあり、特に底びき網における減少幅が大きくなっている。令和5年の合計水揚量は2,543トン（前年比162%、平均比91%）となった（図2）。

※ 平成30年～令和4年の5年平均値と令和5年度の比率、以下「平均比」とする。

(イ) ヒラメ

ヒラメの水揚量は震災（平成23年）以降、平成26年にかけて急増し、平成27年以降5年連続で減少していたが、令和2年から増加傾向にある。令和5年の合計水揚量は121トン（前年比95%、平均比118%）となった（図3）。

(ウ) アイナメ

アイナメの水揚量は震災以降大きく減少し、その後平成26年にかけて増加したが、令和元年から再び減少傾向にある。令和5年の合計水揚量は55トン（前年比86%、平均比73%）となった（図4）。

(エ) マコガレイ・マガレイ

マコガレイ・マガレイの水揚量は、震災以降大きく減少し、その後平成26年にかけて増加したが、

令和元年から再び減少傾向にある。令和5年の合計水揚量は51トン（前年比112%、平均比95%）となった（図5）。

(オ) ババガレイ

ババガレイの水揚量は、震災以降大きく減少したが、その後平成27年にかけて増加した。平成28年以降は減少に転じており、令和5年の合計水揚量は159トン（前年比113%、平均比90%）となった（図6）。

(カ) ミズダコ

ミズダコの水揚量は、平成19年以降比較的高い水準で安定して推移していたが、平成30年以降は1,000トン以下で推移している。令和5年の合計水揚量は369トン（前年比85%、平均比51%）となった（図7）。

(キ) ケガニ

ケガニの水揚量は、平成15年から平成23年にかけて増加し、平成24年以降カゴ、刺網の両漁業種で連続して減少している。令和5年度漁期（令和5年12月～令和6年3月20日現在）の合計水揚量は40トン（前年比70%、平均比104%）となった（図8）。

(ク) チゴダラ（旧エゾイソアイナメ）

チゴダラの水揚量は、平成15年に最も多くなり、その後は長期的に減少傾向となっている。平成26～28年にかけて増加したが、平成29年以降再び減少に転じた。令和5年の合計水揚量は137トン（前年比121%、平均比110%）となった（図9）。

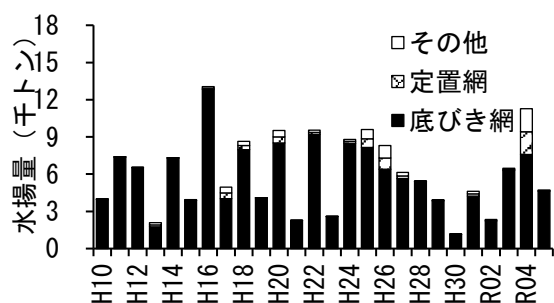


図1 スケトウダラ漁法別漁獲量の推移

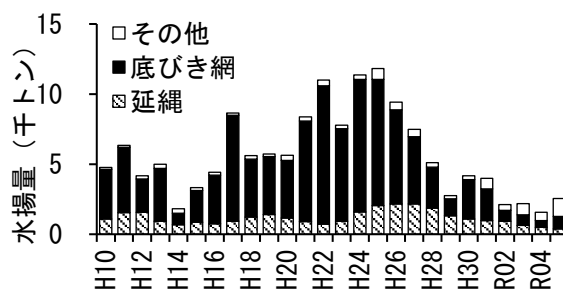


図2 マダラ漁法別漁獲量の推移

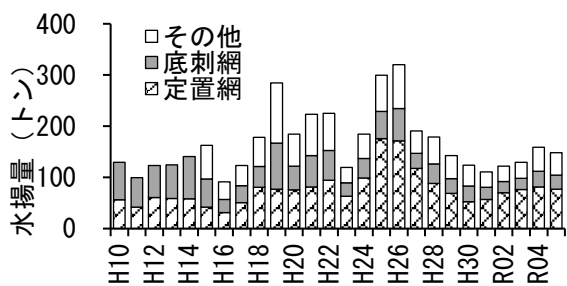


図3 ヒラメ漁法別漁獲量の推移

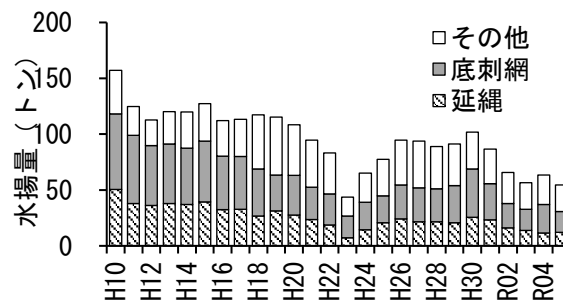


図4 アイナメ漁法別漁獲量の推移

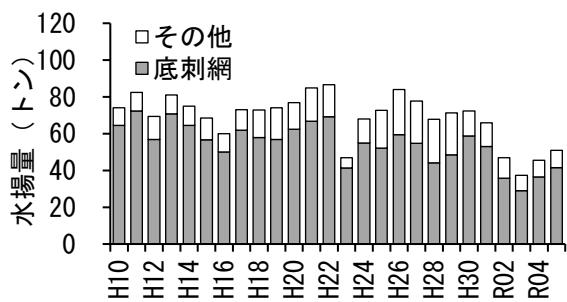


図5 マコガレイ・マガレイ漁法別漁獲量の推移

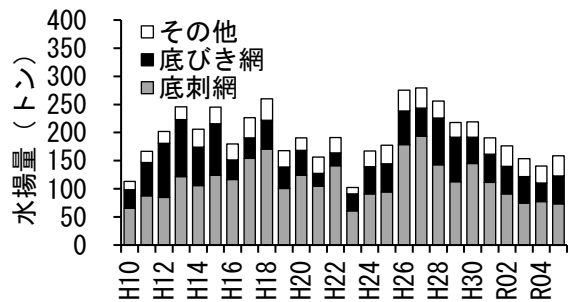


図6 ババガレイ漁法別漁獲量の推移

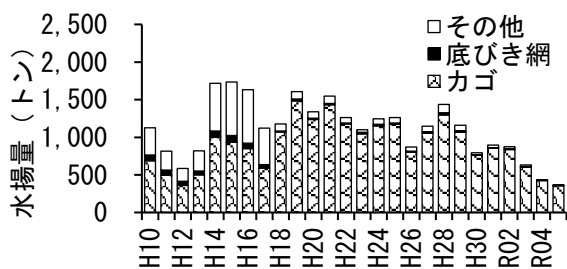


図7 ミズダコ漁法別漁獲量の推移

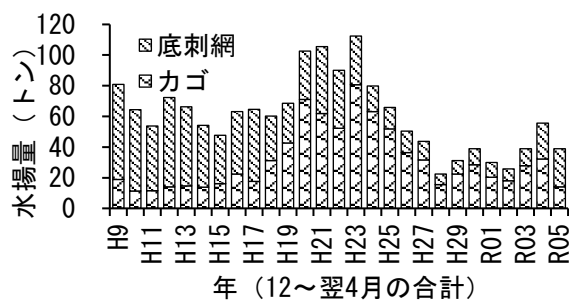


図8 ケガニ漁法別漁獲量の推移

但し、R05はR5.12.1～R6.3.20の集計値

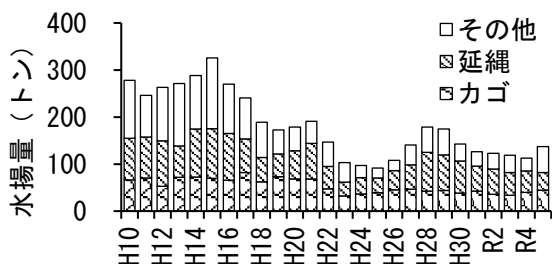


図9 チゴダラ(旧エゾイソイナメ)漁法別漁獲量

イ 回遊性資源及び国際資源

(ア) さば類

さば類の水揚量は震災以降大きく減少し、その後徐々に増加したものの、再び減少傾向にある。令和5年の合計水揚量は15,641トン(前年比72%、平均比71%)であった(図10)。

さば類の年間漁獲量の9割以上を定置網漁獲物が占めていたが、平成29年以降は底びき網による漁獲が増加し、令和5年は定置網が85%、底びき網は13%であった。

(イ) マイワシ

マイワシの水揚量は平成26年以降増加傾向となっている。令和5年の合計水揚量は16,356トン(前年比106%、平均比85%)であった(図11)。

(ウ) カタクチイワシ

カタクチイワシの水揚量は平成28年以降横ばいとなっている。令和5年の合計水揚量は206トン(前年比118%、平均比96%)であった(図12)。

(エ) マアジ

マアジの水揚量は震災以降減少し、その後低い水準で推移している。令和5年の合計水揚量は184トン(前年比68%、平均比65%)であった(図13)。

(オ) ブリ

ブリの水揚量は平成22年以降横ばいとなっている。令和5年の合計水揚量は5,535トン(前年比108%、平均比75%)であった(図14)。

(カ) サワラ

サワラの水揚量は変動が大きく、令和5年度は令和4年度に引き続き少ない水揚量であった。令和5年の合計水揚量は94トン(前年比178%、平均比34%)であった(図15)。

(キ) スルメイカ

スルメイカの水揚量は平成19年をピークに減少傾向となり、平成28年以降低位で横ばいとなっている。令和5年の合計水揚量は2,567トン(前年比129%、平均比105%)であった(図16)。

(ク) ヤリイカ

ヤリイカの水揚量は平成28年以降底びき網を中心に増加傾向である。令和5年の合計水揚量は777トン(前年比162%、平均比165%)であった(図17)。

(ケ) クロマグロ

クロマグロの令和5年の合計水揚量は134.5トン（前年比105.6%）であった（図18）。年によって割合は変動するものの、70～90%が定置網による漁獲であった。

(コ) サンマ

サンマの令和5年の合計水揚量は4,336.3トン（前年比125%）であり、平成10年以降3番目に少ない水揚量であった（図19）。

(ク) サクラマス

サクラマスの水揚量は、平成24年以降40～70トン前後で推移しており、令和5年の合計水揚量は77.7トン（前年比160%）であった（図20）。

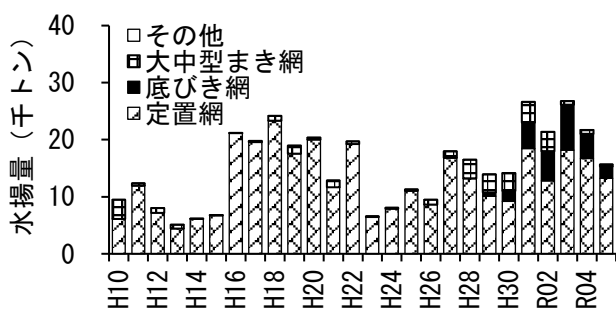


図10 さば類漁法別漁獲量の推移

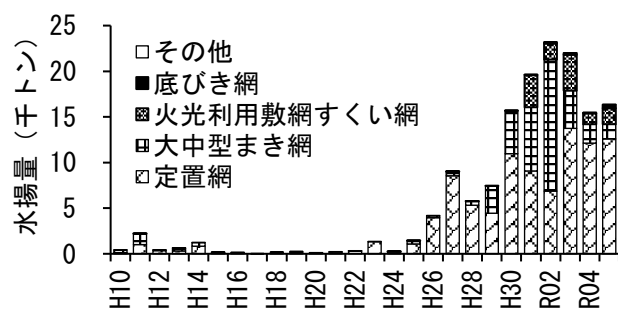


図11 マイワシ漁法別漁獲量の推移

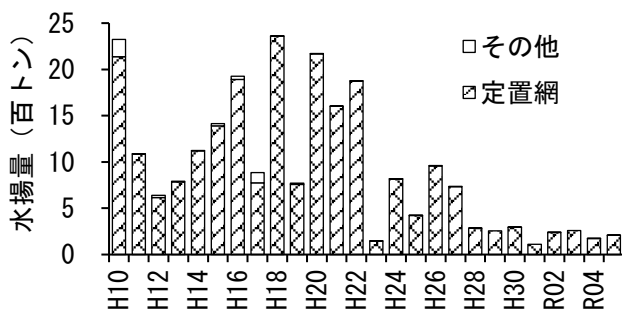


図12 カタクチイワシ漁法別漁獲量の推移

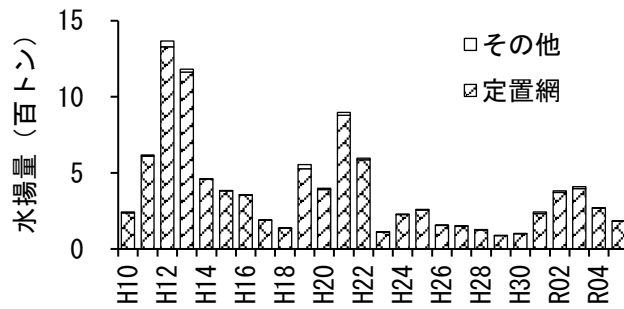


図13 マアジ漁法別漁獲量の推移

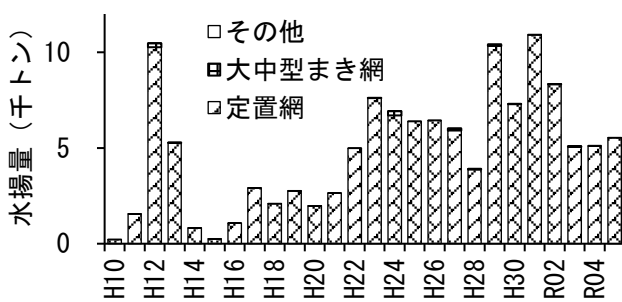


図14 ブリ漁法別漁獲量の推移

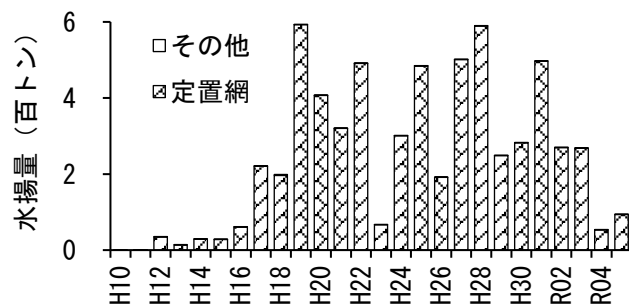


図15 サワラ漁法別漁獲量の推移

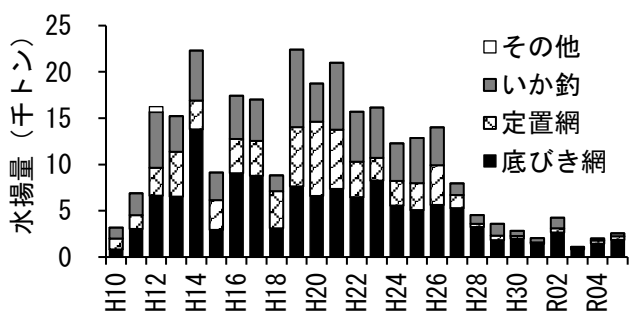


図16 スルメイカ漁法別漁獲量の推移

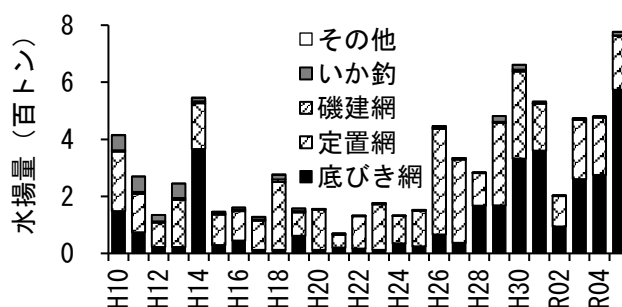


図17 ヤリイカ漁法別漁獲量の推移

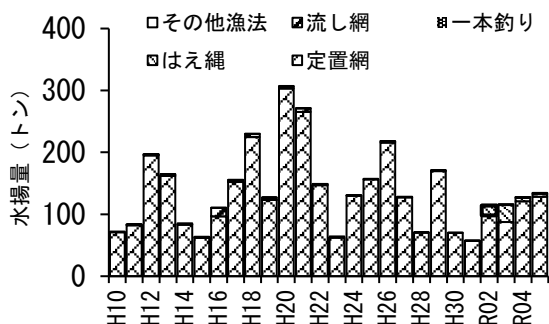


図18 クロマグロ漁法別漁獲量の推移

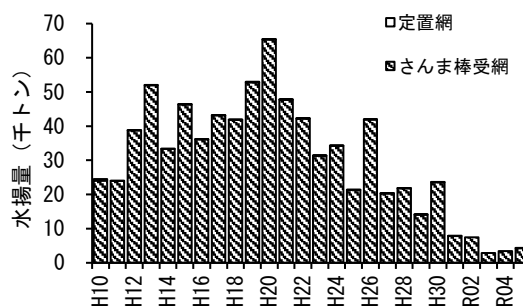


図19 サンマ漁法別漁獲量の推移

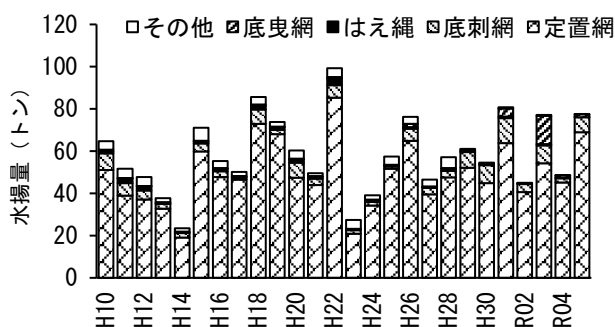


図20 サクラマス漁法別漁獲量の推移

(2) 市場調査

ア 地域性資源

(ア) ヒラメ

久慈で920尾(天然魚833尾、放流魚87尾)、釜石で1,981尾(天然魚1,944尾、放流魚37尾)、大船渡で7,006尾(天然魚6,019尾、放流魚987尾)の魚体測定を実施した。各魚市場における全長の最頻値は、久慈では35cm台(R4及びR3:33cm台)、釜石では38cm台(R4:38cm台、R3:43cm台)、大船渡では42cm台(R4:42cm台、R3:43cm台)であった(図21)。

(イ) アイナメ

久慈で478尾、大船渡で642尾の魚体測定を実施した。全長の最頻値は、久慈で34cm台(R4:33cm台、R3:32cm台)、大船渡で38cm台(R4:37cm台、R3:38cm台)であった(図22)。

(ウ) マコガレイ

久慈において、190尾の魚体測定を実施した。全長の最頻値は29cm台(R4:33cm台、R3:30cm台)であった(図23)。

(エ) ケガニ

釜石において、2,576尾の甲長測定を実施した。甲長の最頻値は90mm台 (R4: 93mm台、R3: 90mm台)であった (図24)。

(オ) チゴダラ (旧エゾイソアイナメ)

久慈で2,427尾、大船渡で418尾の魚体測定を実施した。被鱗体長の最頻値は、久慈で21cm台 (R4及びR3: 23cm台)、大船渡で24cm台 (R4: 23cm台、R3: 25cm台)であった (図25)。

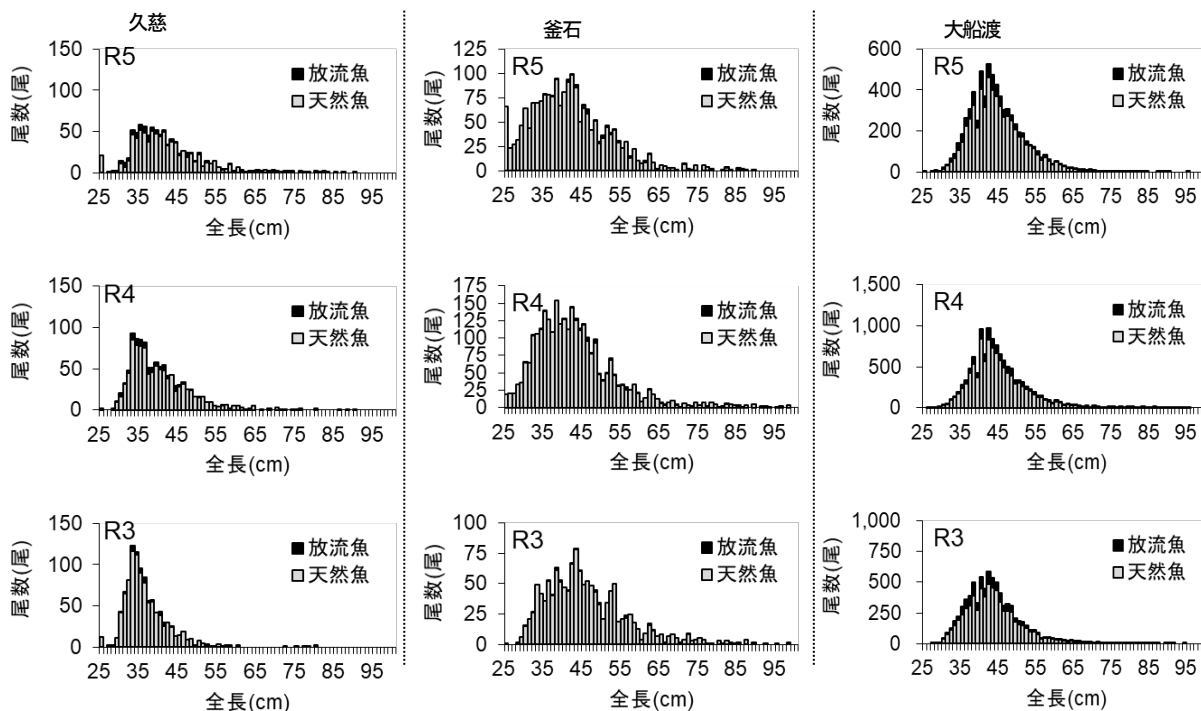


図21 久慈、釜石及び大船渡におけるヒラメ全長組成

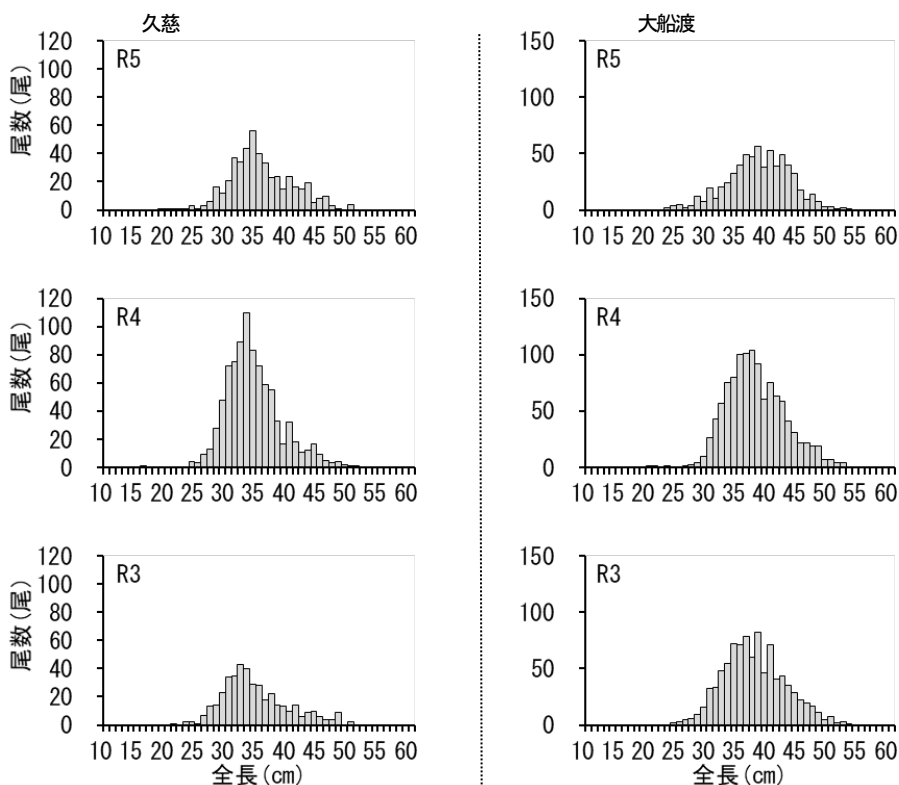


図22 久慈及び大船渡におけるアイナメ全長組成

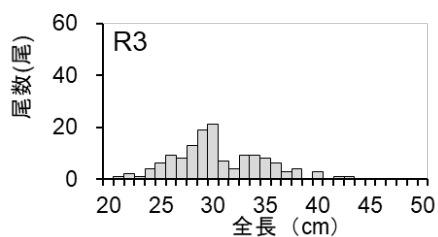
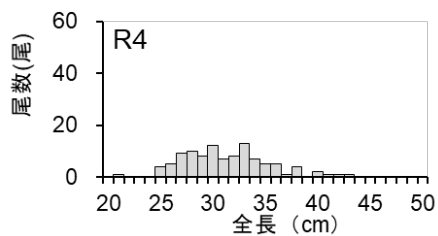
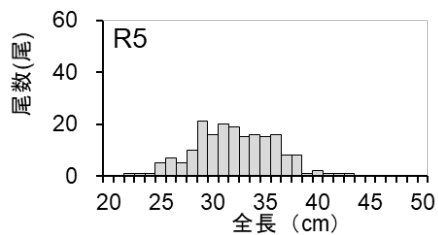


図23 久慈におけるマコガレイの全長組成

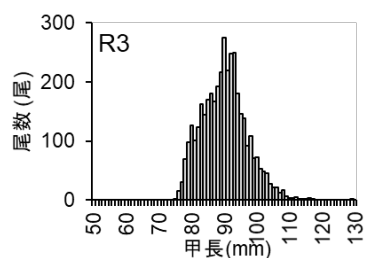
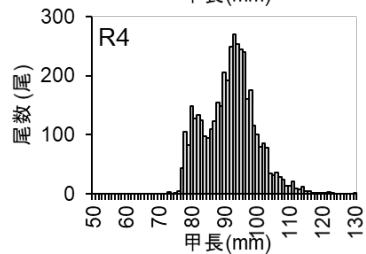
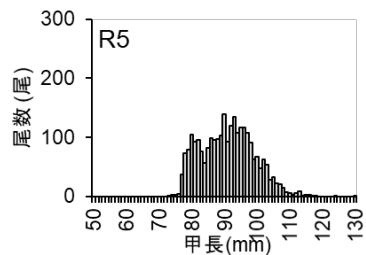


図24 宮古、釜石におけるケガニの甲長組成
R4・R5は釜石のみの集計。

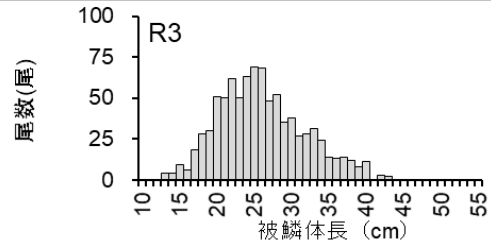
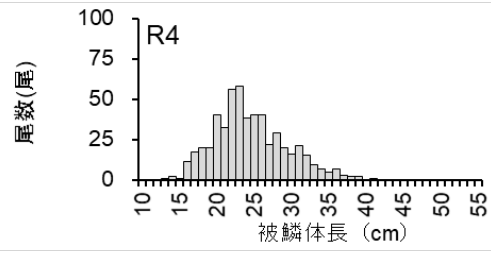
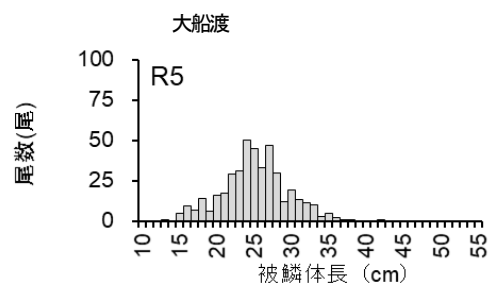
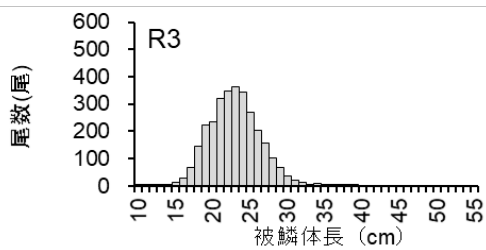
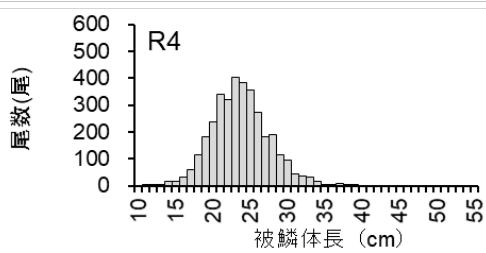
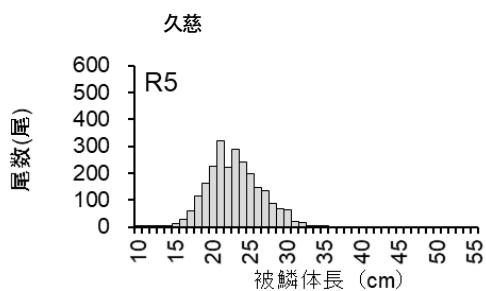


図25 久慈及び大船渡におけるチゴダラ(旧:エゾイソイナメ)の被鱗体長

イ 回遊性資源及び国際資源

(ア) さば類

・ マサバ

久慈及び釜石において、12,874尾の定置網漁獲物の魚体測定を実施した。尾叉長の最頻値は34cm (R3及びR4 : 33cm) であった (図26)。

・ ゴマサバ

久慈及び釜石において、15,355尾の定置網漁獲物の魚体測定を実施した。尾叉長の最頻値は25cm (R3 : 30cm、R4 : 33cm) であった (図27)。

(イ) マイワシ

久慈、釜石及び大船渡において、7,686尾の定置網漁獲物の魚体測定を実施した。被鱗体長の最頻値は15cm (R3及びR4 : 16cm) であった (図28)。

(ロ) カタクチイワシ

久慈において、271尾の定置網漁獲物の魚体測定を実施した。被鱗体長の最頻値は12cm (R3 : 11cm、R4 : 10cm) であった (図29)。

(ハ) ブリ

久慈及び釜石において、6,761尾の定置網漁獲物の魚体測定を実施した。最も出現が多かった尾叉長範囲は30cm台 (R3及びR4 : 30cm台) であった (図30)。

(ニ) サワラ

久慈、釜石及び大船渡において、1,804尾の定置網漁獲物の魚体測定を実施した。最も出現が多かった尾叉長範囲は40cm台 (R3 : 60cm台、R4 : 70cm台) であった (図31)。

(ホ) スルメイカ

宮古において、259尾の沖合底びき網漁獲物の魚体測定を実施した。外套背長の最頻値は21cm (R3 : 21cm、R4 : 23cm) であった (図32左)。

また、久慈、釜石及び大船渡において、3,786尾の定置網漁獲物の魚体測定を実施した。外套背長の最頻値は15cm (R3 : 14cm、R4 : 18cm) であった (図32右)。

(ヘ) ヤリイカ

釜石及び大船渡において、50尾の定置網漁獲物の魚体測定を実施した。外套背長の最頻値は22cm (R3 : 28cm、R4 : 8cm) であった (図33)。

(ト) クロマグロ

釜石において、646尾の魚体測定を実施した。尾叉長の最頻値は、50cm台 (R4 : 60cm台、R3 : 70cm台) であり、水揚サイズの小型化がみられた (図34)。

(チ) サンマ

釜石において、100尾の魚体測定を実施した。肉体長の最頻値は25cm台 (R4 : 28cm台、R3 : 30cm台) であり、水揚サイズの小型化がみられた。また、令和4年と同様に20cm未満の“ジャミサンマ”が見られた。 (図35)。

(リ) サクラマス

野田において、雄37尾、雌188尾の魚体測定を実施した。雄の割合は16% (R4 : 15%、R3 : 15%) であった。尾叉長の最頻値は52cm台 (R4 : 54cm台及び58cm台、R3 : 51cm台及び55cm台) であった (図36)。

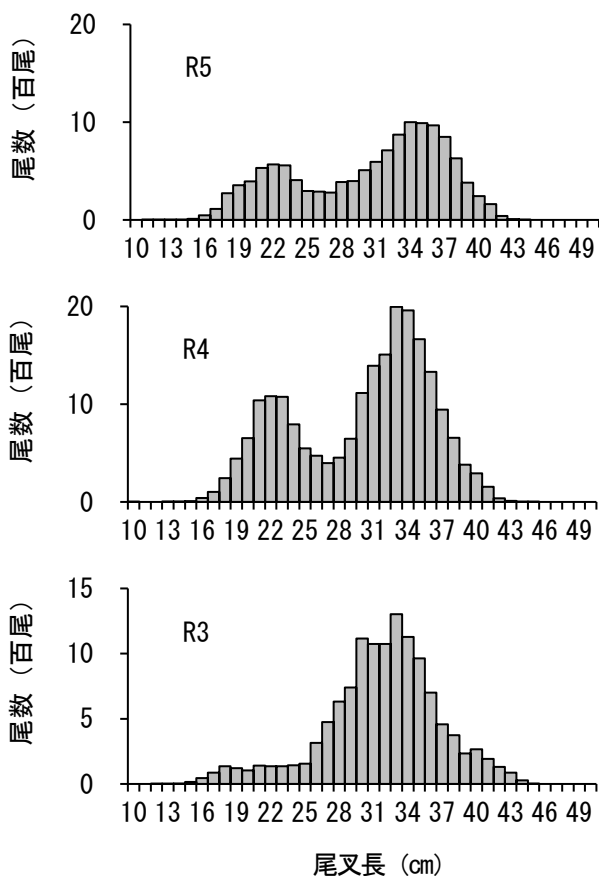


図26 久慈、釜石の定置網におけるマサバの尾叉長組成

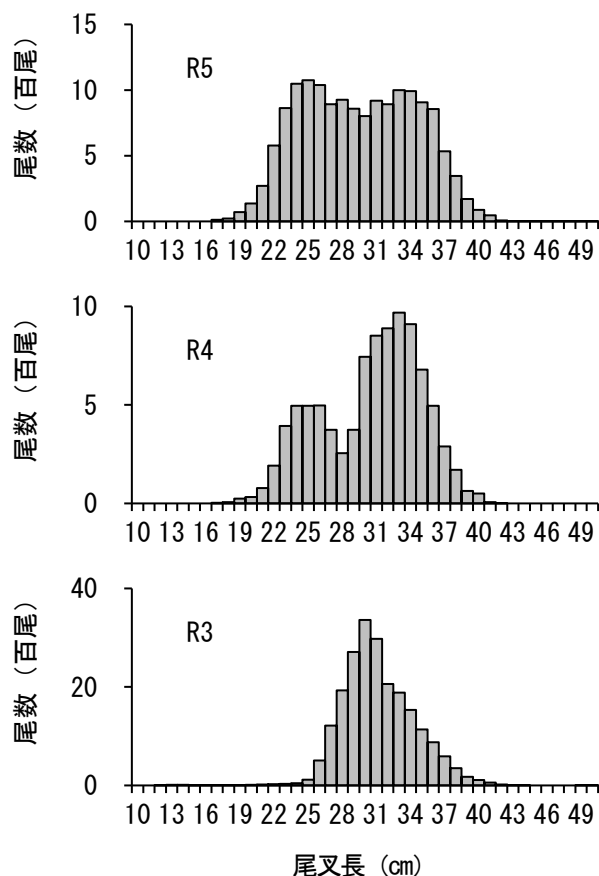


図27 久慈、釜石の定置網におけるゴマサバの尾叉長組成

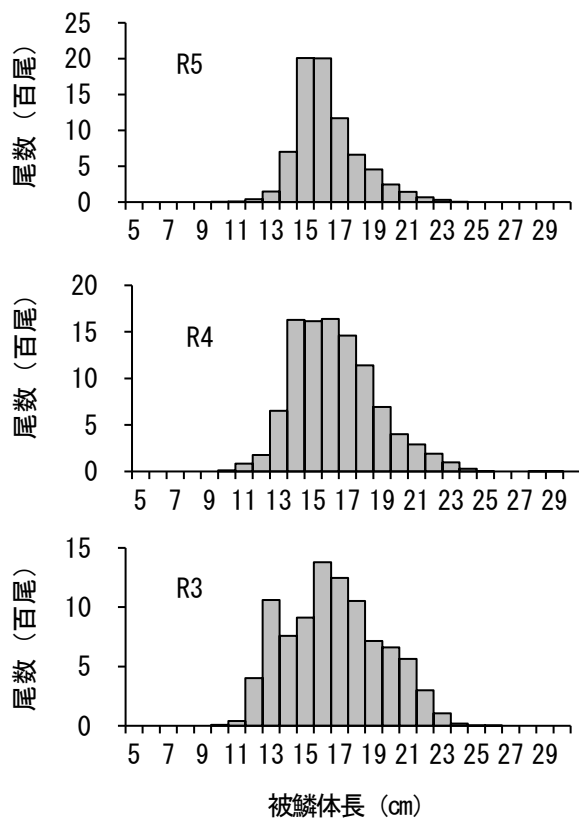


図28 久慈、釜石、大船渡の定置網におけるマイワシの被鱗体長組成

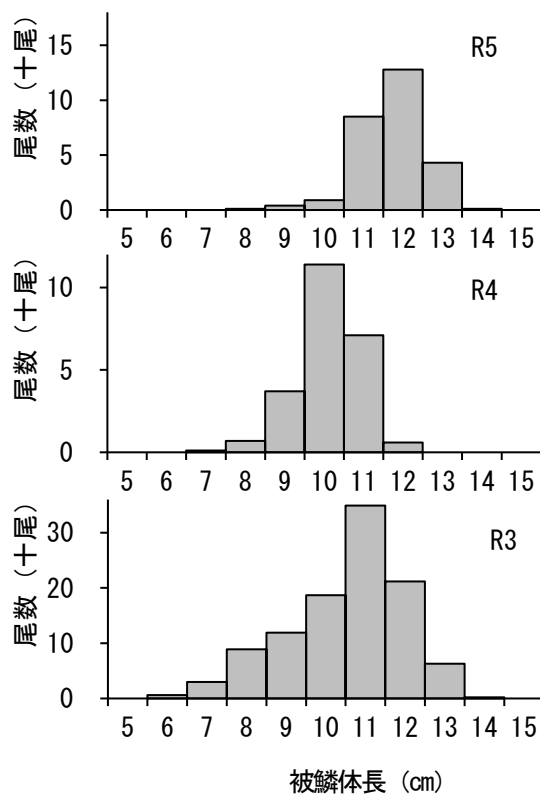


図29 久慈の定置網におけるカタクチイワシの被鱗体長組成

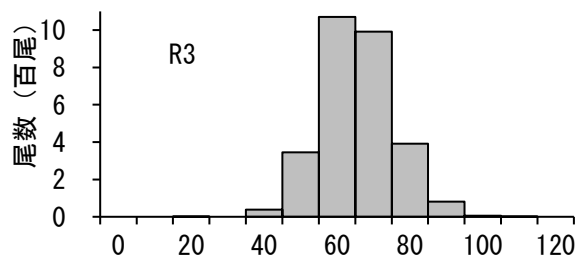
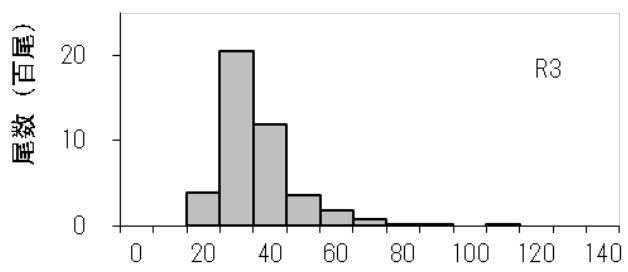
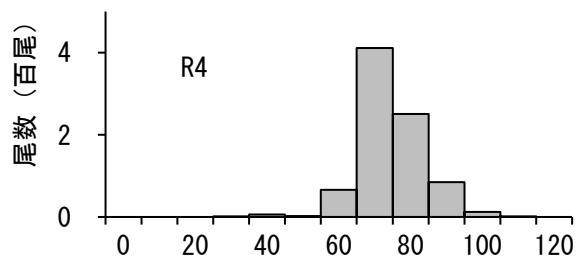
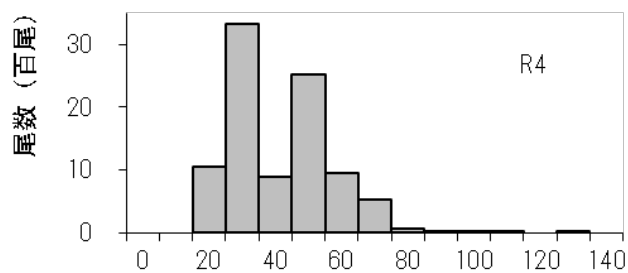
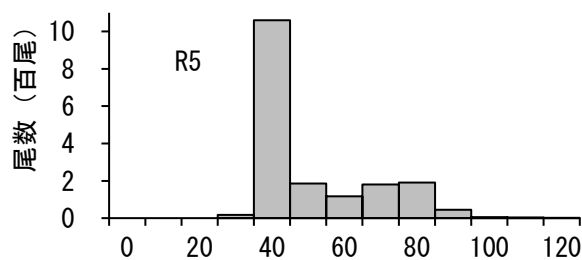
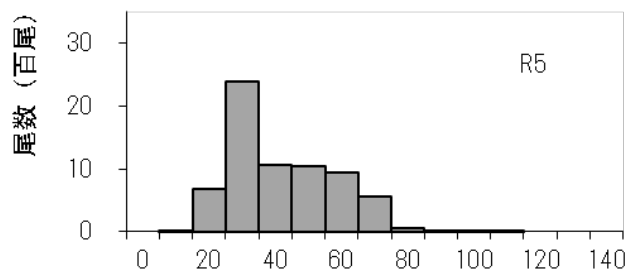


図30 久慈、釜石の定置網におけるブリの尾叉長組成

図31 久慈、釜石、大船渡の定置網におけるサワラの尾叉長組成

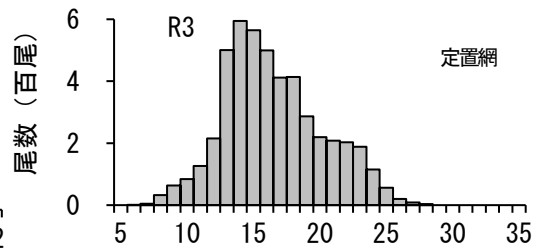
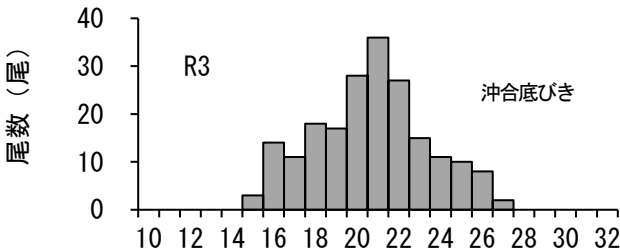
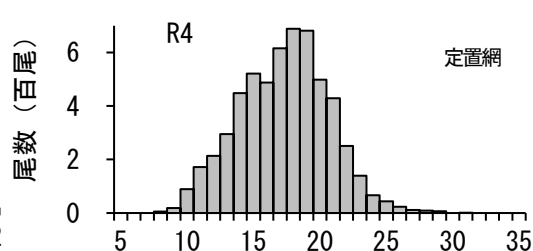
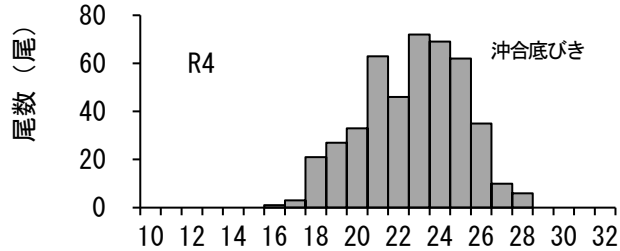
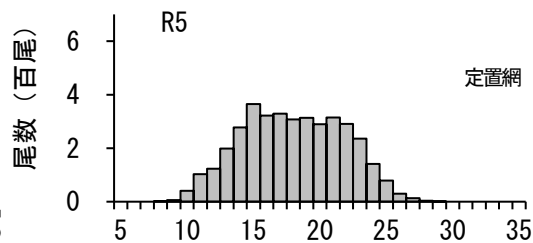
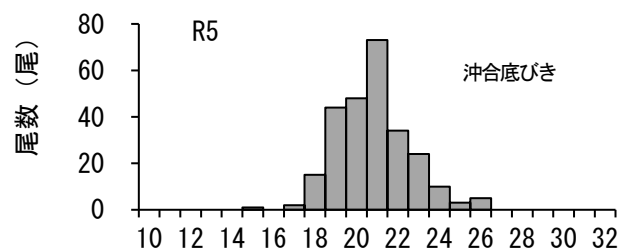


図32 宮古の沖合底びき網及び久慈、釜石、大船渡の定置網におけるスルメイカの外套背長組成

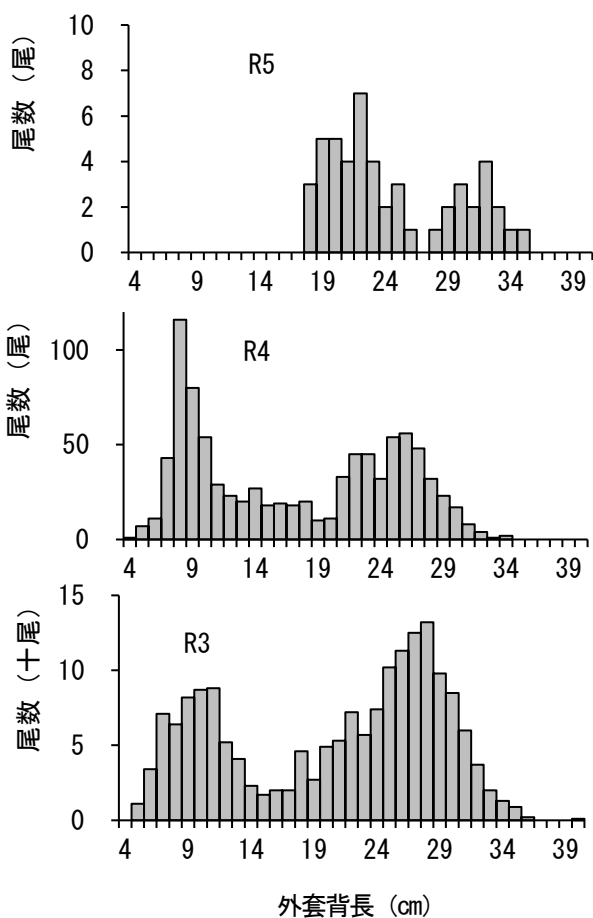


図33 釜石、大船渡の定置網におけるヤリイカの外套背長組成

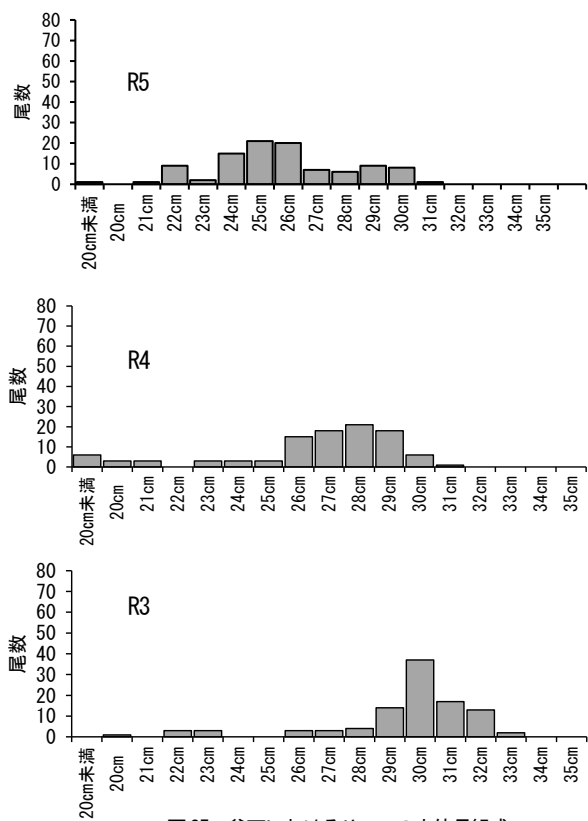


図35 釜石におけるサンマの肉体長組成

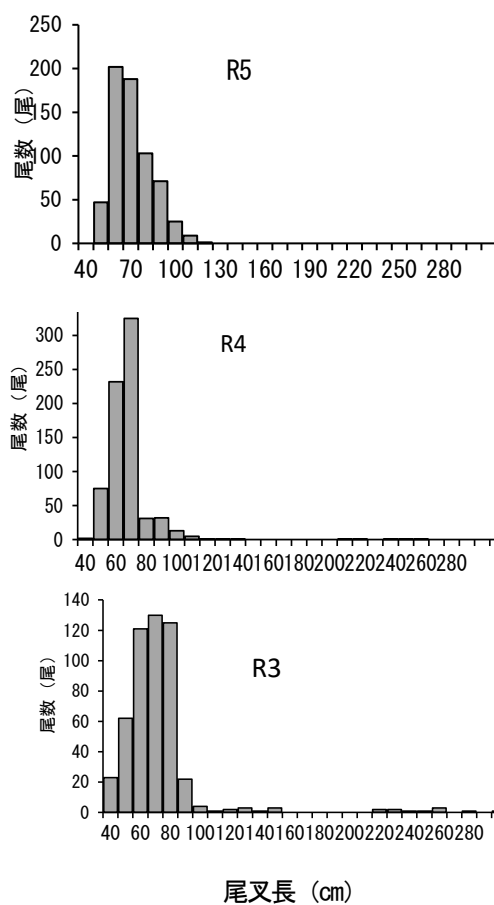


図34 釜石におけるクロマグロの尾叉長組成

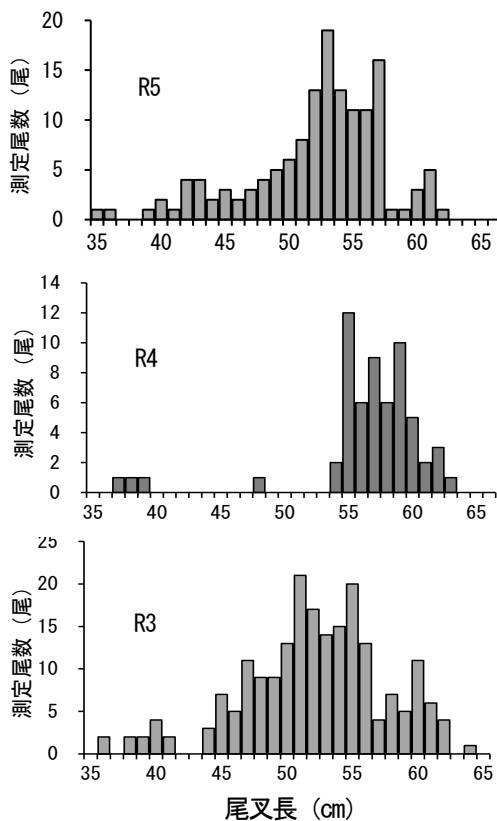


図36 野田におけるサクラマスの尾叉長組成

(3) 調査船調査等

ア 着底トロール調査

(ア) 冬季調査

令和5年1月27日～3月17日にかけて、水深202～356mの18地点（総曳網面積0.430km²）で調査を実施した。

主要魚種の推定現存量は、スケトウダラは0歳魚が3,048千尾・100トン、1歳魚以上が3,958千尾・1,840トンで、0歳魚及び1歳魚以上で前年を上回った。マダラは0歳魚が61千尾・13トン、1歳魚が49千尾・27トンであり、2歳魚以上が20千尾・98トンで、0～2歳魚以上で前年を上回った。また、ババガレイ、サメガレイ、ケガニが前年を上回った（表1）。

(イ) 春季調査

令和5年5月11日～25日に水深207～401mの13地点（総曳網面積0.302km²）で調査を実施した。

主要魚種の推定現存量は、スケトウダラは1歳魚（令和4年級）が1,304千尾・121トン、2歳魚以上が54千尾・28トンで、1歳魚のみ前年を上回った。マダラは1歳魚が23千尾・4トン、2歳魚以上が125千尾・96トンで、1歳魚及び2歳魚以上で前年を下回った。また、ババガレイ、ヒレグロ、サメガレイ及びケガニは前年を下回った（表2）。

(ウ) 秋季調査

令和5年11月13日～22日に水深198～356mの16地点（総曳網面積0.425km²）で調査を実施した。

主要魚種の推定現存量は、スケトウダラは0歳魚（令和5年級）が136千尾・15トン、1歳魚以上が370千尾・162トンで、0～1歳魚以上で前年を下回った。マダラは0歳魚が467千尾・50トン、1歳魚（令和4年級）が465千尾・180トン、2歳魚以上が32千尾・94トンで、1歳及び2歳魚以上で前年を上回った。また、ババガレイ、サメガレイ及びケガニは前年を上回った（表3）。

表1 冬季調査により推定された主要魚種の現存量

魚種名	令和5年現存量		令和4年現存量		前年度比	
	尾数(千尾)	重量(トン)	尾数(千尾)	重量(トン)	尾数	重量
スケトウダラ0歳魚	3,048	100	177	9	17.22	11.11
スケトウダラ1歳魚以上	3,958	1,840	1,132	598	3.50	3.08
マダラ0歳魚	61	13	248	12	0.25	1.08
マダラ1歳魚	49	27	117	22	0.42	1.23
マダラ2歳魚以上	21	98	29	65	0.72	1.51
ババガレイ	98	81	234	68	0.42	1.19
ヒレグロ	162	46	87	20	1.86	2.30
アカガレイ	8	5	0	0	0.00	0.00
サメガレイ	146	94	30	12	4.87	7.83
ケガニ♂	158	58	81	26	1.95	2.23
ケガニ♀	84	16	47	13	1.79	1.23

表2 春季調査により推定された主要魚種の現存量

魚種名	令和5年現存量		令和4年現存量		前年度比	
	尾数(千尾)	重量(トン)	尾数(千尾)	重量(トン)	尾数	重量
スケトウダラ1歳魚	1,384	121	106	7	13.04	17.29
スケトウダラ2歳魚以上	54	28	16,660	7,600	0.00	0.00
マダラ1歳魚	23	4	98	15	0.23	0.27
マダラ2歳魚以上	125	96	89	368	1.40	0.26
ババガレイ	9	57	435	216	0.02	0.26
ヒレグロ	62	11	63	28	0.99	0.39
アカガレイ	17	6	30	11	0.57	0.54
サメガレイ	53	70	194	188	0.27	0.37
ケガニ♂	61	24	75	30	0.81	0.79
ケガニ♀	31	10	41	9	0.75	1.16

表3 秋季調査により推定された主要魚種の現存量（令和4は南海区のみ現存量算出）

魚種名	令和5年現存量		令和4年現存量		前年度比	
	尾数(千尾)	重量(トン)	尾数(千尾)	重量(トン)	尾数	重量
スケトウダラ0歳魚	136	15	911	30	0.15	0.50
スケトウダラ1歳魚以上	370	162	1,358	652	0.27	0.25
マダラ0歳魚	467	50	1,423	64	0.33	0.78
マダラ1歳魚	465	180	19	10	23.93	17.40
マダラ2歳魚以上	32	94	15	46	2.10	2.03
ババガレイ	203	77	31	18	6.49	4.18
ヒレグロ	146	37	197	72	0.74	0.51
アカガレイ	15	10	0	0	0.00	0.00
サメガレイ	72	36	55	33	1.30	1.08
ケガニ♂	380	114	285	102	1.34	1.12
ケガニ♀	129	23	104	20	1.24	1.14

イ カゴ調査

令和5年6月14日～11月1日までに釜石湾の水深90m、100m、120mの3定点（タコカゴ）及び水深200m（ケガニカゴ）において、計9回のカゴ調査を実施した（ケガニカゴは、令和5年10月7日及び11月1日の2回）。漁獲物の合計尾数及び重量は、下表のとおりである（表4）。

なお、タコカゴ調査では、13尾のミズダコにディスクタグを取付けて再放流したが、採捕報告はなかった。

表4 令和5年度カゴ調査における主要漁獲物の概要

調査月日 調査種目 水深帯 (m) 使用カゴ数	6月15日 タコカゴ			7月5日 タコカゴ			7月19日 タコカゴ			8月2日 タコカゴ			9月6日 タコカゴ			9月21日 タコカゴ			10月19日 ケガニカゴ 200	11月1日 ケガニカゴ 200	合計	
	90	100	120	90	100	120	90	100	120	90	100	120	90	100	120	90	100	120	90			
チゴダラ (旧エゾイソアイナメ)	尾数	32	32	8	53	21	36	41	23	63	51	9	20	24	6	17	10	6	6	16	77	551
	重量(kg)	15	12.3	2.73	17.2	5.3	8.4	9.7	5.4	14	13.1	1.4	4.2	6.2	1.4	3.7	1.8	1.5	2.3	1.44	26.5	153.4
ババガレイ	尾数	3	3	6	4	3	8	6	2	12	5	2	8								2	64
	重量(kg)	2	1.14	3.1	1.86	1.4	4	4.1	0.7	6.2	1.8	0.6	2.9								0.4	30.2
マダラ	尾数																					0
	重量(kg)																					0.0
アイナメ	尾数									1												1
	重量(kg)									1.8												1.8
マアナゴ	尾数																					0
	重量(kg)																					0.0
その他魚類	尾数		1	5	3		1	2	1	2				1	1					5	29	51
	重量(kg)		0.15	1.34	4.22		0.27	0.4	0.5	0.3					0.12	0.1				0.78	3.2	11.4
ミズダコ	尾数				2		3				2	1		1		5				1	1	16
	重量(kg)				12		9.32				5.3	2		5.3		23				1.1	12.7	70.6
マダコ	尾数																					0
	重量(kg)																					0.0
ヤナギダコ	尾数																					1
	重量(kg)																					0.4
その他タコ類	尾数			1			1						3							2	11	18
	重量(kg)			1.74			1.28						5.7							2.3	22.4	33.4
ケガニ♂	尾数																			30	22	52
	重量(kg)																			5.9	4.1	10.0
ケガニ♀	尾数																			6	2	8
	重量(kg)																			0.49	0.3	0.79

ウ 底延縄調査

令和5年6月29日～11月2日までに釜石湾の水深114m～121mの定点において計5回の底延縄調査を実施した。主な採集物の合計尾数及び重量は下表のとおりである（表5）。

表5 令和5年度底延縄調査における主要漁獲物の概要

調査月日		6/29	9/7	9/20	10/20	11/2	合計
使用針数		800	800	800	800	500	
チゴダラ (旧エゾイソアイナメ)	尾数	63	24	22	10	9	128
	重量(kg)	25.2	5.1	4.6	2.1	2.6	39.6
タヌキメバル	尾数	13	23	32	24	10	102
	重量(kg)	5.6	6.1	11.1	8.6	5.4	36.8
マダラ	尾数						0
	重量(kg)						0.0
アイナメ	尾数						0
	重量(kg)						0.0
ババガレイ	尾数						0
	重量(kg)						0.0
マアナゴ	尾数						0
	重量(kg)						0.0
ウツカリカサゴ	尾数	1	1	5	1		8
	重量(kg)	0.8	0.5	2.1	0.5		3.9
ウスメバル	尾数	2	1	2		2	7
	重量(kg)	0.4	0.3	0.5		0.7	1.9
エゾメバル	尾数	17	6	3	14	32	72
	重量(kg)	4.8	1.7	0.8	5.5	9.6	22.4
フグ類	尾数		1		1		2
	重量(kg)		0.8		1.2		2.0
その他魚類	尾数	8		10	3		21
	重量(kg)	1.9		2.8	0.8		5.5

エ サンマ漁場調査結果

(ア) 民間船聞き取り調査

釜石港における民間船聞き取り調査結果は下表のとおりである(表6)。

(イ) 岩手丸による漁場調査

令和5年10月19日、10月26日にトドヶ崎より南の海域で漁場探索を行ったが、サンマ魚群は確認できなかった。

表6 民間船聞き取り調査結果

操業月日	操業位置		網数 (回)	漁獲量 (トン)	表面水温 (°C)	魚体の割合			魚群性状	魚群濃淡	魚群の大きさ	灯付状態	混獲物	CPUE
	緯度(N)	経度(E)				大	中	小						
10月18日	40-02	144-35	15	7	16°C台	0	2	8	シラミ	淡	小	不良	なし	0.47
10月18日	40-05	144-50	10	1.5	16°C台	0	2	8	シラミハネ	淡	小	やや不良	なし	0.15
10月18日	39-55	144-50	10	4	16.5~17.5°C	0	2	8	シラミ	淡	小	不良	なし	0.40
10月18日	39-58	144-46	21	7.5	16.0	0	2	8	シラミ	淡	小	やや不良	なし	0.36
10月27日	40-06	145-34	5	1	16.1	0	1	9	シラミ	淡	小	不良	なし	0.20
10月27日	40-06	145-33	1	0.2	16.5	0	1	9	シラミ	淡	小	不良	なし	0.20
10月28日	40-03	145-54	4	0.3	16.0	0	1	9	シラミ	淡	小	不良	なし	0.08
10月30日	39-35	142-18	15	8	17.6	0	3	7	シラミ	淡	小	不良	なし	0.53
11月2日	40-03	143-00	5	0.2	18.4	0	2	8	シラミ	淡	小	やや不良	なし	0.04
11月3日	39-34	142-19	7	0.4	17.6	0	2	8	シラミ	淡	小	やや不良	なし	0.06
11月4日	39-37	142-15	14	1	18.0	0	2	8	シラミ	淡	小	やや不良	なし	0.07
11月5日	39-36	142-11	5	0.1	18.9	0	2	8	シラミ	淡	小	やや不良	なし	0.02

オ スルメイカ漁場調査結果

令和5年6月5日~8月2日にかけて、岩手丸によるいか類一斉調査を実施した。スルメイカ、アカイカ及びスジイカが合計153尾採捕され、平均CPUE(釣機1台1時間あたりの釣獲尾数)は1.59尾であった。令和5年7月18日~10月26日に実施した漁場形成状況調査の合計釣獲尾数は33尾、平均CPUEは0.69尾であった(表7)。

令和5年6月26日~10月25日にかけて、北上丸による漁場形成状況調査を実施した。スルメイカが合計378尾採捕され、平均CPUEは4.30尾であった(表8)。

表7 岩手丸による漁場調査結果

調査次数	調査月日	調査位置		水温 (°C)			釣獲時間 (h) : t	釣機台数 (台) : n	釣獲尾数 (尾) : c	CPUE (c/n/t)	種名	備考 (調査点No)
		N	E	0m	50m	100m						
第1次太平洋 いか類一斉調査	6/5	39-30.13	142-45.09	20.3	18.2	15.5					観測点	3
	6/5	39-30.15	143-00.20	21.9	20.7	18.3	2.0	3	45	7.5	アカイカ (45)	4
	6/5~6	39-00.04	143-30.21	21.8	21.7	19.0	2.0	3	15	2.5	アカイカ (15)	5
	6/7	39-00.08	143-45.06	22.5	22.3	18.8					観測点	6
	6/7	39-00.05	144-00.07	22.1	20.9	18.9	2.0	3	1	0.2	アカイカ (1)	7
	6/7~8	39-00.08	144-30.16	20.8	19.8	18.5	2.0	3	0	0.0		8
	6/8	39-15.03	144-30.06	23.0	22.2	19.8					観測点	9
	6/8	39-30.04	144-30.17	21.9	20.6	17.2	2.0	3	31	5.2	アカイカ (31)	10
	6/9	39-30.11	144-00.19	22.8	22.0	18.8	2.0	3	21	3.5	アカイカ (21)	11
	6/9	39-30.10	143-30.14	22.0	21.0	18.3					観測点	12
	6/10	39-30.12	143-00.06	20.5	16.8	13.1	2.0	3	1	0.2	アカイカ (1)	13
	6/10~11	39-30.04	142-29.98	14.8	11.0	4.5	2.0	3	0	0.0		14
	6/11	39-00.03	142-30.06	20.0	15.9	13.5	2.0	3	1	0.2	アカイカ (1)	2
	6/11~12	39-00.04	142-01.15	19.7	15.6	12.4	2.0	3	0	0.0		1
第2次太平洋 いか類一斉調査	7/27	39-30.01	142-49.99	24.1	13.1	9.0	2.0	3	6	1.0	アカイカ (3)、スジイカ (3)	9
	7/27~28	39-29.94	142-20.07	24.6	10.6	9.3	2.0	3	1	0.2	スルメイカ (1)	10
	7/31	39-00.18	142-19.95	26.8	21.2	18.0	2.0	3	0	0.0		1
	7/31~8/1	39-00.03	142-50.10	26.8	21.7	19.3	2.0	3	1	0.2	アカイカ (1)	2
	8/1	39-00.10	143-30.10	26.5	21.7	19.4					観測点	3
	8/1	39-00.06	144-00.08	26.8	21.4	19.3					観測点	4
	8/1	38-59.98	144-40.09	27.3	21.8	19.3	2.0	3	0	0.0		5
	8/1~2	39-30.07	144-40.35	26.7	21.7	19.0	2.0	3	30	5.0	アカイカ (30)	6
	8/2	39-30.04	144-00.21	26.6	20.8	18.9					観測点	7
	8/2	39-30.07	143-30.06	26.8	21.9	18.6					観測点	8
一斉調査累計釣獲尾数									153			
一斉調査平均CPUE										1.59		
漁場調査	7/18	39-15.00	142-17.50	19.2	11.9	8.1	2.0	3	0	0.0		
	8/21	39-06.41	142-03.42	27.3	15.3	13.3	2.0	3	7	1.2	スルメイカ (7)	
	8/21	39-14.26	142-06.41	27.8	15.0	12.7	2.0	3	14	2.3	スルメイカ (14)	
	8/24	39-32.76	142-11.28	24.5	14.4	14.4	2.0	3	0	0.0		
	8/24~25	39-21.49	142-08.51	23.5	14.6	14.3	2.0	3	9	1.5	スルメイカ (9)	
	9/12	39-20.01	142-07.85	23.0	17.8	13.6	2.0	3	3	0.5	スルメイカ (3)	
	10/12	39-52.18	142-09.97	19.1	16.3	11.6	2.0	3	0	0.0		
	10/26	39-30.70	142-09.56	18.8	17.0	15.3	2.0	3	0	0.0		
漁場調査累計釣獲尾数									33			
漁場調査平均CPUE										0.69		

表8 北上丸による漁場調査結果

調査次数	調査月日	調査位置		水温 (°C)			最下層	釣獲時間 (h) : t	釣機台数 (台) : n	釣獲尾数 (尾) : c	CPUE (c/n/t)	種名	備考
		N	E	0m	50m	100m							
夜間操業	1	6/26	39-17.67	141-57.00	17.1	13.4	12.1	2.0	4	37	4.6	スルメイカ (37)	手釣5尾
	2	6/26~27	39-15.76	141-57.40	16.9	13.4	11.8	2.0	4	39	4.9	スルメイカ (39)	手釣9尾
	3	7/13	39-08.59	141-54.35	18.0	14.6	13.2	2.0	4	127	15.9	スルメイカ (127)	手釣28尾
	4	7/27	39-24.63	142-01.84	21.9	17.8	16.3	2.0	4	53	6.6	スルメイカ (53)	手釣5尾
	5	7/27~28	39-16.68	141-59.55	21.6	17.1	14.0	2.0	4	92	11.5	スルメイカ (92)	手釣28尾
	6	9/13	39-08.74	141-54.19	24.1	17.8	15.4	2.0	4	14	1.8	スルメイカ (14)	手釣6尾
	7	9/13	39-11.91	141-55.81	24.3	18.9	14.3	2.0	4	15	1.9	スルメイカ (15)	手釣8尾
	8	9/27	39-19.54	141-59.56	23.5	19.0	15.9	2.0	4	0	0.0		
	9	9/27	39-17.71	141-57.18	23.7	20.9	15.3	2.0	4	0	0.0		
	10	10/25	39-08.65	141-54.50	20.2	18.2	14.8	2.0	4	0	0.0		
	11	10/25	39-11.98	141-55.75	19.9	17.2	16.4	1.5	4	1	0.2	スルメイカ (1)	手釣0尾
累計釣獲尾数									378				
平均CPUE										4.30			

(4) ヒラメ稚魚追跡調査 (新規加入量調査)

野田湾において令和5年8月18日~10月18日に計3回、大槌湾において令和5年7月25日~10月3日に計3回調査を実施した。各湾におけるヒラメ0歳魚の平均分布密度は、野田湾で7.23尾/1000m² (前年比10倍、平均比196%)、大槌湾で4.92尾/1000m² (前年比59%、平均比33%) であり、大槌湾において着底稚魚の分布密度は低い水準であった (図37)

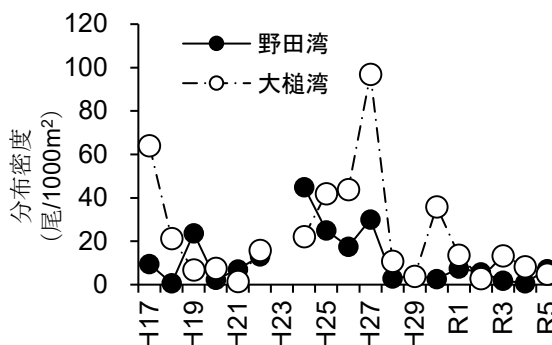


図37 ソリネット調査におけるヒラメ0歳魚の平均分布密度

(5) サクラマス資源評価に係る河川調査

ア 産卵床踏査調査

令和5年度に調査を行った3河川（盛川、甲子川、片岸川）の産卵床密度を比較すると、甲子川の釜石高校裏～橋橋が最も高かった。なお、令和4年からの産卵床密度は、いずれの河川でも減少傾向であった。（表9）。

表9 調査区間ごとのサクラマス産卵床密度の推移

	区間	産卵床密度(基/km)					備考	
		H30	R1	R2	R3	R4		R5
盛川	坂本沢	調査対象外	4	23	36	32	19	R1年より追加
	長安寺橋	2	0	調査対象外				工事のため
	大渡橋	6	2					
甲子川	釜石高校裏～橋橋	18	1	21	30	65	45	
	野田橋～野田大橋	7	5	20	25	20	5	
	ジョイス釜石裏	8	増水で調査できず	0	調査対象外			工事のため
	小川川(日向ダム下)	調査対象外	調査対象外	15	0	10		
片岸川	山谷橋～山谷淵まで	調査対象外	2	22	22	18	8	R1年より追加
熊野川	国道45号線より上流	調査対象外	0	0	調査できず			R1年より追加

イ 資源量調査

区間1の推定生息密度は、12月14日の調査でも初日とほぼ同等であった。一方、区間2の推定生息密度は、調査初日の令和5年10月27日で最も高く、その後、右肩下がり減少した（図38、39）。

なお、4月以降も採捕尾数及び推定生息密度、新規加入群の生育状況等のモニタリングを実施予定である。



図38 サクラマス資源量調査区域図

(地図データは国土地理院Webより引用し、当方で改変。)

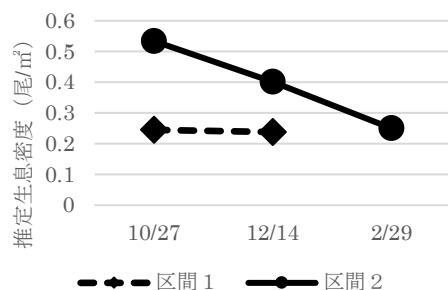


図39 サクラマス資源量調査推定生息密度

(6) 資源量水準、資源動向の評価

ア 地域性資源

(イ) スケトウダラ及びマダラ

着底トロール調査に基づくスケトウダラの被鱗体長組成及び年級別現存量は、冬季調査では、17cm

台（1歳魚）及び39cm台・4～6歳魚が主体、春季調査では、被鱗体長18cm台・1～2歳魚が主体、秋季調査では、26cm台・2歳魚が主体となっていた（図40、41）。

なお、令和4年（2022年）漁期のスケトウダラ（太平洋系群）の資源量（親魚量）水準は1.96[※]、動向は増加と判断されている（令和5年度資源評価報告書）。

マダラについては、冬季調査では20・21cm台、春季調査では被鱗体長26cm台、秋季調査では12cm台主体となっていた（図42）。なお、令和4年（2022年）漁期のマダラ（太平洋北部系群）の資源量（親魚量）水準は0.9[※]、動向は増加と判断されている（令和5年度資源評価報告書）。

※ 最大持続生産量MSYを実現する親魚量に対する現在の親魚量の比率。1以上でMSYを実現する水準より多いことを示す。

(イ) ヒラメ

資源量は平成22年頃から3歳以上の高齢魚を主体に増加し、平成25年を最大として減少に転じた。令和元年から再び増加傾向となり、令和5年漁期は前年より増加した。資源量水準は中位、動向は横ばいと判断した（図43）。

(ロ) アイナメ

資源量は近年4歳以上の高齢魚に大きく偏り、若齢魚の割合が低下し続けている。令和5年は、全ての年齢で前年を下回った。資源量水準は低位、動向は横ばいと判断した（図44）。

(ハ) マコガレイ

資源量は6～8年周期で増減を繰り返す傾向が認められていたが、平成26年以降は減少傾向が継続している。令和5年は、前年を下回り、資源量水準は低位、動向は減少と判断した（図45）。

(ニ) ミズダコ

北上丸によるカゴ調査結果に基づく体重階級別CPUE（10カゴあたりの平均採集尾数）は、平成20～23年にかけて比較的高位で安定していたが、平成24年以降は減少傾向にあり、特に2kg未満の小型個体が大きく減少している（図46）。令和5年は、全ての体重階級で前年を下回った。資源量水準は低位、動向は減少と判断した。

(ホ) ケガニ

北上丸によるカゴ調査結果に基づく甲長70mm台以上のオスガニの甲長階級別CPUE（1カゴあたりの平均採集尾数）は、平成20年～22年にかけて一時的に増加したものの、平成24年以降低水準で推移している。令和5年は、70mm・80mm台の甲長階級別CPUEで前年を上回った。資源量水準は中位、動向は増加と判断した（図47）。

なお、調査船調査及び資源評価結果等に基づき、令和5年度漁期（令和5年12月～令和6年4月）の漁況を「前年度を上回る」と予測・公表した。令和6年3月25日現在までの漁期中のかご漁獲量は20トン（前年度漁期：32トン）、刺し網漁獲量は29トン（前年度漁期：23トン）で刺し網は既に前年度を上回っている。

(ヘ) チゴダラ（旧エゾイソアイナメ）

北上丸によるカゴ調査果に基づくCPUE（10カゴあたりの平均採集尾数）は、平成22年を最大にその後は減少し、横ばいで推移している。令和5年は、前年を下回った（図48）。

また、北上丸による底延縄調査果に基づくCPUE（100針あたりの平均採集尾数）は、平成25年を最大に減少に転じ、その後、かご調査とほぼ同様の変動を示しており、令和5年は、前年を下回った。令和5年は、資源量水準は低位、動向は増加と判断した。

(ト) タヌキメバル等

北上丸による底延縄調査結果に基づく主要底魚類のCPUE（100針あたりの平均採集尾数）は、タヌキメバル、チゴダラ、マダラ、アイナメ、ハシバガレイで前年を下回った（図49）。

このうち採捕数の多いタヌキメバルについては、全長30cm台・6歳魚が主体であった（図50、51）。

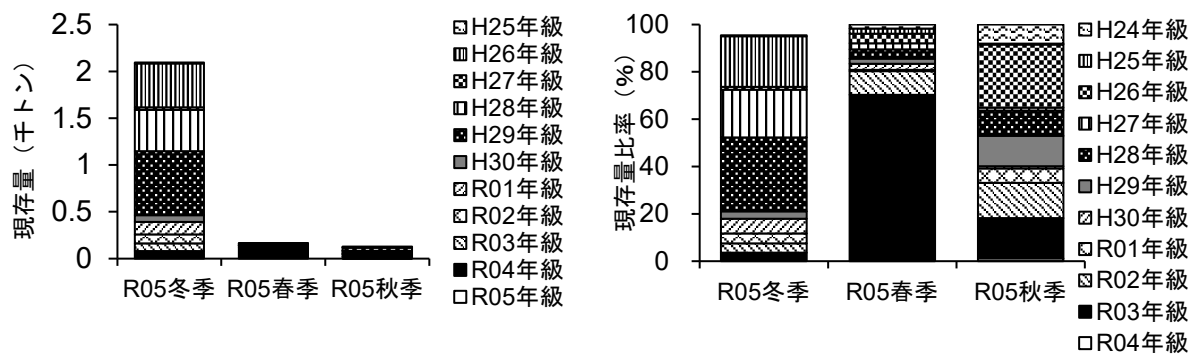


図40 令和5年着底トロール調査に基づくスケトウダラの年級別現存量
(左：現存量、右：現存量の比率)

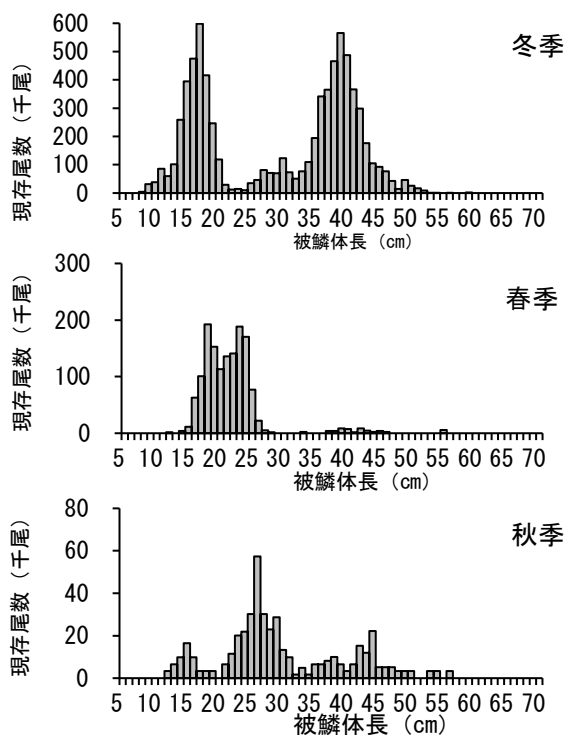


図41 令和5年着底トロール調査におけるスケトウダラの被鱗体長組成

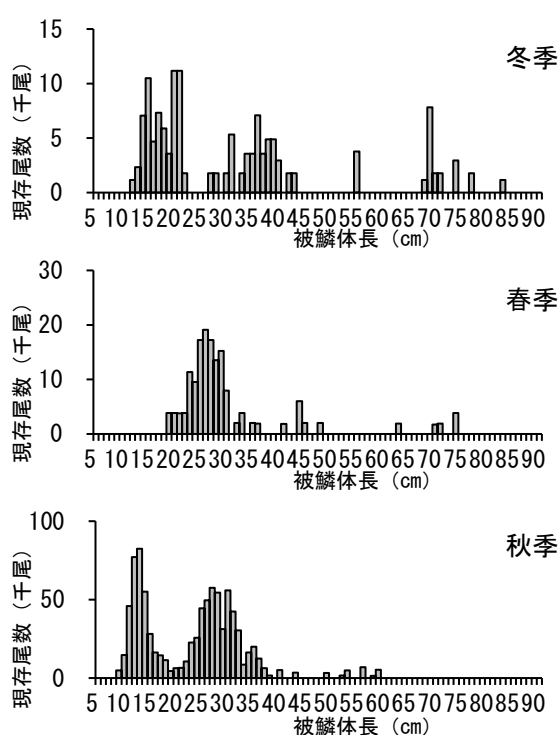


図42 令和5年着底トロール調査におけるマダラの被鱗体長組成

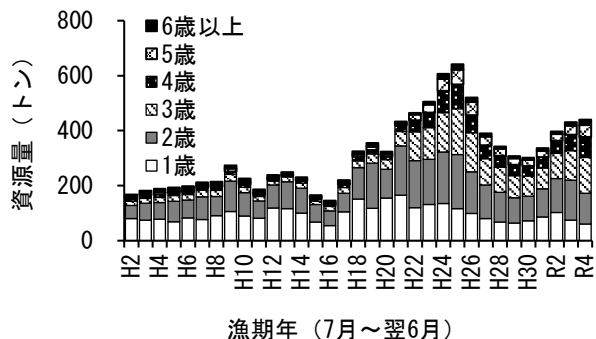


図43 岩手県におけるヒラメ資源量の推移

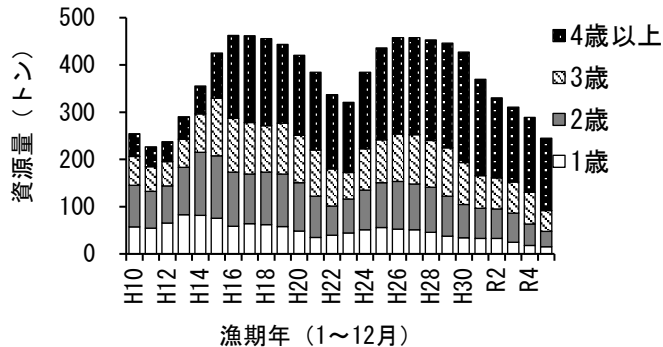


図44 岩手県におけるアイナメ資源量の推移

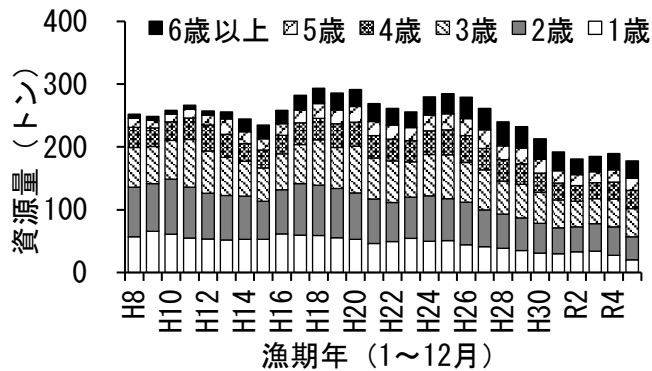


図45 岩手県におけるマコガレイ資源量の推移

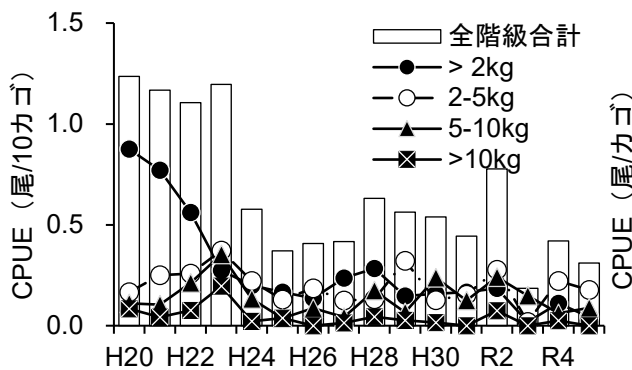


図46 採集されたミズダコの体重階級別 CPUE

ケガニ漁期前調査を除く4月～翌年3月タコカゴ調査で集計。

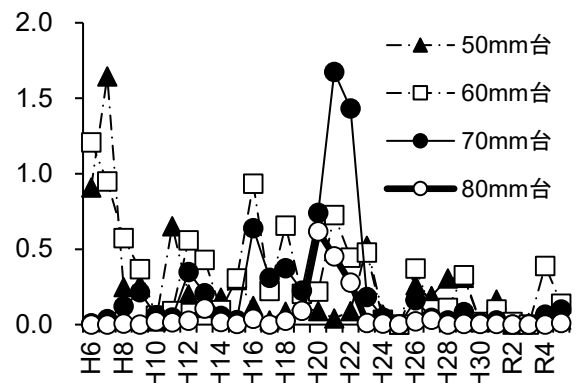


図47 カゴ調査で採集されたケガニの甲長階級別 CPUE

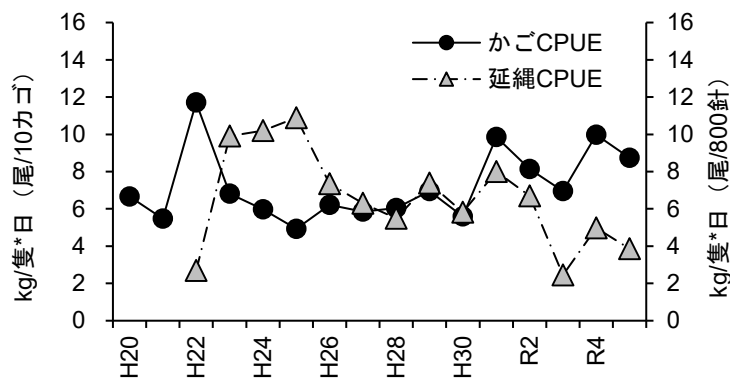


図48 カゴ調査におけるチゴダラ (旧エゾイソアイナメ) のCPUE

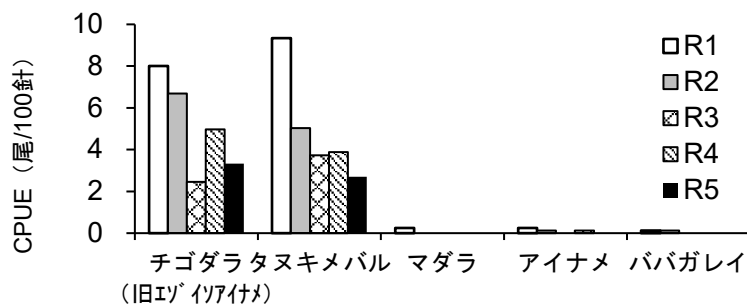


図49 令和元年～令和5年度底延縄調査で採集された主要底魚類の魚種別 CPUE

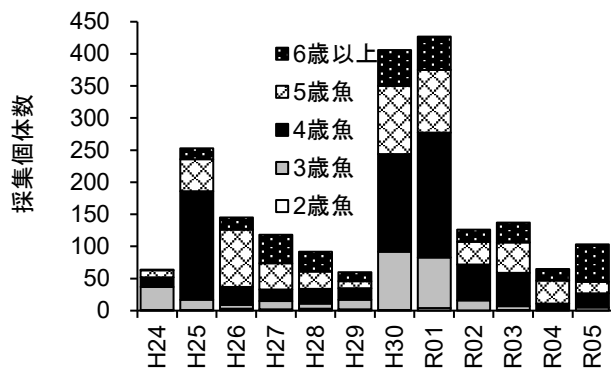


図50 タヌキメバルの年齢別採集個体数

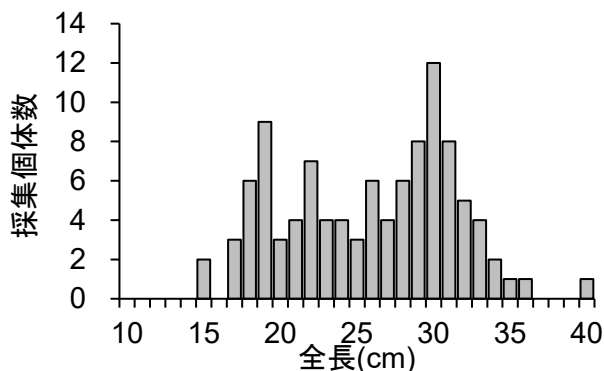


図51 タヌキメバルの全長組成

イ 回遊性資源及び国際資源

回遊性資源及び国際資源の資源評価については、表10のとおり（令和5年度資源評価報告書を基に作成）。

表10 本県の主要な水産資源の資源量水準と動向

魚種	評価年	R01		R02		R03		R04		R05	
		資源量水準	動向	資源量水準	動向	資源量水準	動向	資源量水準	動向	資源量水準	動向
回遊性浮魚類											
スルメイカ※1 (冬季発生群)		低位	↘	0.24 ※2	→	0.21 ※2	→	0.20 ※2	→	0.24 ※2	→
さば類※1 (マサバ太平洋系群)		0.77 ※2	↗	0.69 ※2	↗	0.86 ※2	↗	1.06 ※2	→	0.60 ※2	↘
さば類※1 (ゴマサバ太平洋系群)		0.33 ※2	↘	0.31 ※2	↘	0.38 ※2	↘	0.27 ※2	↘	0.45 ※2	↘
マイワシ※1 (太平洋系群)		中位	↗	1.33 ※2	↗	1.45 ※2	↗	1.86 ※2	↗	2.03 ※2	↗
カタクチイワシ※1 (太平洋系群)		低位	↘	低位	↘	<1	※3	0.71 ※2	↗	1.13 ※2	↗
マアジ※1 (太平洋系群)		低位	↘	0.34 ※2	↘	0.29 ※2	↘	0.46 ※2	→	0.43 ※2	→
ブリ※1,4		高位	↘	高位	↘	<1	※3	0.59 ※2	↘	0.84 ※2	→
サワラ※1 (日本海・東シナ海系群)		高位	→	高位	↘	高位	↘	0.91 ※5	※3	1.09 ※5	→
サンマ※1 (北太平洋系群)		中位	↘	低位	↘	低位	↘	低位	↘	低位	↘
クロマグロ※1 (太平洋系群)		低位	↗	低位	↗	低位	↗	中位	↗	中位	↗
サクラマス※1 (日本系群)		中位	→	中位	→	中位	→	中位	→	中位	→

※1 国の令和5年度資源評価に基づく。国の資源量水準・動向評価は評価年の前年が対象。

※2 新しい資源評価方法により、最大持続生産量MSYを実現する親魚量SBmsyに対する現在の親魚量SBの比を表記。

※3 当該年の資源評価報告書には、資源量水準又は動向の記載なし。

※4 令和5年度版の資源評価報告書では、ブリを1系群で統一。

※5 令和5年度版の資源評価報告書では、大中型まき網CPUEの平均を1として時の比で表記。

＜今後の問題点＞

1 市場調査及び調査船調査等による資源動向のモニタリング

資源状態の悪化に加え、近年の海洋環境の変化により、分布域・成長・成熟といった資源生態学的特性が変化している可能性が考えられる。そのため、必要なデータ収集・整理に努め、より正確な資源量の推定や標準化 CPUE の導入等の資源評価の高度化が必要な状況となってきている。

また、東南北部海域では暖水性魚種の漁獲量が増加傾向であり、これらの魚種を対象とした新たな漁法が発展してきている。従来の漁獲対象魚種に加えて、新たな漁獲対象魚種についての利用及び資源管理についても情報収集を行う必要がある。

＜次年度の具体的計画＞

1 資源量水準の現状評価、資源動向予測及び加入動向把握

市場調査及び調査船調査による主要漁業対象魚種のモニタリングを継続し、現状評価及び加入動向の把握を行う。また、本県独自に実施した資源評価結果について、水産技術センターHP上で公開する。加えて、資源量推定が可能な魚種の検討及び資源評価手法の高度化に向け、情報収集及び検討を進める。

2 資源生態学的情報の収集

市場調査及び調査船調査により得られた標本の精密測定を行い、資源生態学的特性の変化や、海洋環境との関係についての情報収集及び検討を進める。

ア マダコの資源生態に関する情報収集、漁海況予測の検討・試行

イ マイワシの資源生態に関する情報収集

＜結果の発表・活用状況等＞

1 資源評価票及び長期漁海況予報等

令和5年度魚種別系群別資源評価（計18種）

令和5年度岩手県沖における漁業資源の生態と資源特性

令和5年度資源評価 報告書（計3種：評価調査：アイナメ、アブラボウズ、状況報告：チゴダラ）

2 研究報告書等

森、奥西、岩手県海域における底魚類の漁獲物組成の変化（東北ブロック底魚研究連絡会議）

森、奥西、三陸海域における魚種組成の変化（水産海洋学会東北地域水産海洋研究集会）

森、奥西、岩手県沖合域における魚種物組成の変化と海洋環境の関係（令和6年度日本水産学会春季大会）

3 広報等

漁況情報号外（令和5年度ケガニ漁況情報）

漁況情報（旬報）、水産技術センターHP、延べ26回

スルメイカ情報（いか釣情報）、水産技術センターHP、1回

サンマ中短漁況予報、水産技術センターHP、延べ9回

サンマ長期漁況予報、水産技術センターHP、延べ1回

太平洋いわし類、マアジ、さば類長期漁海況予報、水産技術センターHP、延べ3回

太平洋スルメイカ長期・中短期漁海況予報、水産技術センターHP、延べ4回

マサバ中短期漁場予測、水産技術センターHP、1回

定置網マサバ・マイワシの漁期開始期予報、HP、延べ2回

漁業指導調査船による漁獲調査結果広報（漁業無線を通じた民間漁船等への漁場調査結果の即時配信）

4 その他

森、岩手県沿岸域及び沖合域における魚種の変化と海洋環境の関係について（令和5年度第1回岩手県資源管理協議会かご漁業者協議会）

- 森、同上（令和5年度第1回岩手県資源管理型漁業沿岸漁業者協議会）
- 森、同上（令和5年度第1回岩手県資源管理型漁業実践漁業者協議会）
- 森、岩手県におけるタコ類とスルメイカの漁況について（久慈支部漁業士会）
- 小野寺、岩手県におけるスルメイカの水揚動向（八戸意見交換会）
- 森、岩手県のタコ類資源について（第58回県下漁協女性部群別研修会上閉伊支部）
- 森、タコ類の資源状況と改良カゴについて（岩手県漁業士会釜石支部令和5年度自主活動事業 漁業者セミナー）
- 森、近年の岩手県海域の資源動向と海況の関係（いわて水産アカデミー開講5周年記念公開講演会）